学校図書館と非来館型サービス

―コロナ禍での卒業論文指導における新聞記事データベース活用事例から―

立教女学院中学校高等学校
山本　祥子

＜抄　録＞

2020年３月以降，一斉休校や短縮授業などにより，コロナ禍は生徒の図書館利用に大きな影響を与えている。本稿では，特に卒業論文指導における「朝日けんさくくん」の活用事例を取り上げ，本校の非来館型サービスの現状と課題について報告する。

＜キーワード＞

学校図書館，新聞記事データベース，
新型コロナウイルス，卒業論文，非来館型サービス

1　はじめに

本校は，東京都杉並区にキャンパスを有する女子中高一貫校である。1877年に米聖公会の宣教師であるC・M・ウィリアムズによって設立されて以降，「知的で品格のある凛とした女性」の育成を目指し，キリスト教を主軸に据えた人間教育を実践してきた。

「ARE※学習」は2000年度に設置された本校の独自科目であり，自らテーマを求め，調査し，発表することで自学自習能力を養うことを目的としている。中学の３年間で課題設定力・調査研究力・表現発表力の下地を完成させ，最終学年である高校３年生では学びの集大成である卒業論文の執筆を行う。本稿では，主にこの高校３年生の卒業論文指導における新聞記事データベースの活用事例について紹介する。

※ARE：自らテーマを求め（Ask）調べ（Research）言語化して発表する（Express）の頭文字

2　本校の図書館について

蔵書数は約７万７千冊。年間およそ２万冊の図書が貸し出され，約250時間の授業利用がある。中学１年生から高校３年生まで，幅広い学年が利用する図書館であり，ジュニア向け文庫から学術書・専門書まで，幅広い蔵書を備えている点が特色である。

主な取り組みとしては，４月の新入生オリエンテーション，ブックトーク，ビブリオバトル，杉並区立図書館と連携した授業支援，図書委員による選書ツアーなどを行っている。この他，2020年度は社会科教員とのコラボレーション企画である読書会，高３ARE受講生を対象にした図書館講座などのイベントを予定していたが，いずれも緊急事態宣言の発令により中止，またはオンデマンド形式での配信に切り替えざるを得なかった。図書館講座のオンデマンド配信については，次章で概略を述べる。

写真１　館内の様子

3　コロナ禍における対応

休校が明け，分散登校が開始された2020年６月より図書館サービスを再開した。再開にあたり，換気の徹底，館内閲覧席のレイアウト変更，アクリル板の設置，手指消毒用アルコールの設置，閉館後の館内消毒，返却本の一定期間隔離措置，混雑時の見回り指導など，密を避け，感染を予防するための対策を徹底した。

また，長期休校や分散登校に伴う休館・開館時間短縮に対する救済処置として，返却期限の一律延長，貸出冊数の制限解除の他，電子図書館をはじめとする非来館型

YAMAMOTO, Shoko：立教女学院中学校高等学校（東京都杉並区久我山 4-29-60）

サービスの導入についても検討を開始し，できる範囲での読書支援・学習支援を行った。

さらに，2020年度末に予定していた図書館講座が中止になったことを受け，講座の内容を15分程度の動画５本にまとめ，GoogleClassroomを通じて受講予定だった学年に配信した。講座のテーマは「卒業論文執筆のための情報検索入門」とし，研究領域についての事前調査，リサーチクエスチョンの設定，仮説の検証などの各ステップで必要になる情報検索スキルについて解説を行った。動画作成にあたり実習の編成を見直し，感染状況が悪化し再び休校措置がとられることがあったとしても学習を継続できるよう，自宅でも利用できるオンラインデータベースの紹介を中心に講座の内容を組み替えた。

4　「朝日けんさくくん」の活用

コロナ禍の長期休校・図書館休館に対する特別措置として，いくつかのオンラインデータベースの提供元から，学外アクセス用の臨時ID発行に関する案内が寄せられた。休校中の生徒の学習環境を保証するため，本校でも可能な限り多くの学外アクセスIDを取得できるよう努めたが，中でも生徒から最も評価が高かったのが，朝日新聞社が提供する中高生向け新聞記事データベース「朝日けんさくくん」であった。

2020年度のARE受講生を対象に実施されたアンケートでは，「コロナ禍の学習体制について，オンラインコンテンツは利用したか」という質問に対し，ほとんどの生徒が「よく利用したデータベース」として「朝日けんさくくん」を挙げており，「自宅で利用できた点がよかった」という意見も多数寄せられた。

活用方法もバラエティに富んでおり，自分が興味のある領域の記事を満遍なく閲覧してリサーチクエスチョン設定の参考にしたり，仮説を補強する材料として関連する記事や統計情報を検索したり，キーワードに関連する記事のヒット数が一番多い年代を調べるのに使ったりと，さまざまであった。データベースで収集した情報をどの程度論文執筆に活かすことができたかについてはそれぞれの生徒が選んだテーマによって差があったが，時事的なテーマを選択した受講生の中には，日々更新される記事をフォローするために休校中毎日「朝日けんさくくん」を閲覧していたという生徒もいた。

2021年７月現在，４度目の緊急事態宣言が発令されていることからもわかるように，感染状況は未だ予断を許さない状況である。特に人口が密集している都内においては，未だラッシュ時を避けた下校時刻に合わせて短縮開館を余儀なくされている学校図書館も多いのではないかと思われる。データベースを使い慣れていない生徒の場合，検索結果に応じて必要な情報がヒットするまで何度もキーワードを変えなければならないため，オンラインデータベースの利用による情報収集にはまとまった時間が必要であり，放課後の利用が制限されている状況下では十分な活用を促すことは難しい。オンラインデータベースを提供する各社には，学外利用が可能な契約プランを，学校と企業双方にとって持続可能な形で実現して頂けるよう，強く希望したい。

5　おわりに

現代の時代性を表す言葉としてVUCAというアクロニムがあるが，コロナ禍に見舞われた昨年３月以降はまさに，変動性・不確実性・複雑性・曖昧性に満ちた１年であり，誰もが正解のないなかでの決断を迫られる日々を送っていたのではないだろうか。このような時代だからこそ，生徒たちには大きな波に流されることなく，自分で情報を収集し，評価し，周囲と協力して問題を解決できる大人になってほしい。2020年度は情報リテラシー教育拠点としての学校図書館の重要性を再認識した１年であった。

場としての図書館やモノとしての図書資料には，デジタルには変換できない価値がある。しかし，この先しばらくは「図書館に集わなくても活用できる図書館サービス」の可能性を模索していかなければならない期間が続くだろう。コロナ禍をきっかけに非来館型サービスを導入し始めたとはいえ，本校の図書館はまだまだ従来の来館型サービスを中心に運営しており，本格的な電子図書館の構築にあたっては多くの課題が残されている。

自宅から利用できるオンラインデータベースの中でも，新聞記事データベースは速報性・検索性・信頼性の３点において比較的優れた情報源であり，探求学習の教材として大きな可能性を秘めていると感じている。現状では高校３年生が主な利用層となっているが，他学年にも活用事例を広げていくことを今後の課題としたい。